磯馴松

清水紫琴

青空文庫

上

ゲエープツ、ああ酔つたぞ酔つたぞ真実(ほんと)に好い心持に酔つて。かう酔つた時の心持は実に何ともいへないや。嬶(かかあ)が怒らうが、小児(がき)が泣かうがサ、ハハハハゲエープツ、ああ好い心持だ。こんな心持は天下様でも恐らく御存じはあんめえ。チヤアンと何もかも御存じなのは、お月様ばかりだ。お月様てえ奴は実に憎くない奴よ、おらがあすこでもつて飲んでる時アどうだ甘(うま)いだらうと、いつたやうな顔付でもつて見てござる。いざ帰らうとなると、チヤアンと外へ出て、先に立つて歩行(あるい)てござらア。いくら酔つても溝へ落つこちないのは、全くお月様のお蔭なんだ。全くだ実に有難てえや。その上かうして家まで送つて下さつたからツて、嬶アに告げ口一ツなさらうぢやなし、送り込んどいてずんずんと西へ西へとお歩行なさる。実にそこは大気なものさネ。たまにやア一ペイお上がんなさいと申し上げたいんだけれど、下界は嫌だと見向きもなさらないところがえれえやハハハハ。いやえれえといへば今晩の嬶アの権幕もまたえれえ事だらうよ。あれでももとはまんざら話せねえ女でもなかつたんだけれど、世帯を持つて小児が出来てからといふものは、そこは女の浅ましさだネ。お前さんはなる口だけに、気が捌けてて嬉しいよと、あいつめ背中を叩きアがつた事を忘れてサ、そんなに飲んぢやいけない、あんなに酔つちやア済まねえと、毎日日にちおれを意地めやアがるんだ。真実に女子といふものは仕方

のないものさネ。まんざら素白い素生でもねえ僻に、男の身躰は、酒で持つんだてえ事を、忘れやアがつたから、まるツきり話せねえや。オツト危険ねえ、すんでの事溝へ落つこちるところだつけ。

空を仰ぎて

ハハハお月様が笑つてござらア、あんまりおれが夢中になつて愚痴をこぼすもんだから。独言つつ月もあかしの町外れを、一歩は高く一歩は低く、ひよろりひよろりと来かかる男、煮染めたやうな豆絞りの手拭、だらしなく肩に打掛けて、仕事着の半纏も、紺といはれしは、いつの昔の事やらむ。年月熟柿の香に染みて、夜眼には鳶とも見紛ふべきが、片肌はぬげかかりて、今にも落ちさうなるには心付かねど、さすが生酔の本性は違はでや、これも人の住家にやと、怪しまるるあばら屋の門辺にて立止まり、

ここだここだ違げへねえ違げへねえ、いくら酔つても、この家を、覚えてるところがえれえぢやねえか。じやアお月様、御免なさいし、毎度どうも有難うがす。

振向きたるまま、さらでも倒れかけし表戸に、ドサリ身を寄せ掛けたれば、メキメキと音して戸とともに転げ込みし身を、やうやくに起こして、痛き腰を撫でながら、

チヨツ危険ねえや、こんな戸を鎖しとくもんだから、ヲイお千代火を見せてくんな、まるで化物屋敷へ踏ン込んだやうだ。

呼べど答へなきにニタリと笑ひ、

ウウ山の神はもう寝ツちまつたんだな、まづは安心上々吉の首尾だ。また遅いとか早えとかいつて、厳しい御託を蒙らうもんなら、せつかくの興も醒めて、翌朝また飲直しと出掛けなくツちやアなんねえのだ、ヤツコラマカセ

と戸を飛越えて、

南無八幡ぢやアなかつた、山の神大明神、この酔心地醒まさせたまふなかハハハハ

興に乗りて柏手一ツ二ツ叩くを、前刻より寐た振りして聞きゐたる女房、堪へかねてや、かんばりたる声張上げ、

何だよお前今頃に帰つて来て、何を面白さうに独りで饒舌(しやべつ)てるんだ。もう疾(と)くに最終(しまい)汽車は通つてしまつたよ。早く這入つておしまひな。馬鹿馬鹿しい、近所合壁へも聞こえるや。小言きながら手暴く枕もとのかんてらひきよせて、マツチも四五本気短く折り捨てたる末、やうやくに火を移せしを見れば、垢にこそ染みたれ、この家には惜しきほどの女房なり。

いや有難てえや、早く這入れとは、神武以来の御深切(しんせつ)だ。実はかうなんだ、あまり閾(しきい)が高えもんだから、それでつい躓いたのよ。ぢやア真平御免なさいやしかハハハハ

うつつたわいもなきままに、上り口といふも一間きりの、框へバタリと倒れたるまま、はや正躰なき様子に、女房はいとどぢれ込みて、ヌツと起き出で、その枕を蹴らぬばかり頭の際に突立ちて足踏み鳴らし、

これサお前そんなところへ寐ツちまツて、どうする気なんだえ。しつかりおしよ、今に落

ツこちらアな。そして戸はどうしたんだえ、明けツ放しぢやないか。

ムニヤムニヤムニヤ。

真実に仕方がないねえ、まるつきり夢中なんだもの。

ふしやうぶしやうに、庭に下りて、外れし戸をやうやくに建て合はせ、竿竹にてともかくも支へ来り、上りかけにわざと強く夫の足に突当たれば、

アイタアイタ痛てえや、何をするんだ。

気味よしといはねばかり、女房は冷やかに笑ひて、

怪我だわな。こんな処へ足が出てやうとは思はないからね。

少しくきツとなりて、

何かえお前、今まで仕事先に居たのかえ。

うるせえや、知れた事を聞くねえ。

何だとえ、知れた事だツて。エあンまり馬鹿におしでない。どこの世界に、今まで仕事させとく親方があるもんかね。おおかたまた、どこかで飲んでたんだらう。

だから知れ事だと、いふ事よ。

女房は口惜しさうに夫の顔を見て、鋭き眼を涙に曇らせ、

よくまアそんな事がいへたもんだね、あンまりで私やアものもいへやアしない。——ようつもつても御覧、お前の飲んだくれも久しいもんだが、お前は何かえ、この間中私と松とは、

どうして過ごしてるとお思ひなのだエ。私が少しずつでも銭儲けする間は、そりやアどうにかかうにかして、母子(ふたり)がお粥でも啜ってるんだ。だがこの節は私の内職も隙(ひま)だから、ちつともお金の工面は出来やアしないし、それに相変はらずお前は飲み歩行(あるい)てばかしゐて、ちつとも家へお金を入れておくれでないから、私やアこの十日ばかりは、御飯(ごぜん)も喰べたり喰べずぢやないか。それをいやほど知つてる癖に、なぜ少しでも持つて帰つておくれでないのだえ。あれ程お前朝頼んどいたぢやないか、それにいつも同じ気で、今までよそで飲んでるなんざアあまりお前ひどいぢやないか。私や松を女房子とお思ひではないかえ。

いひかけて傍に寐させし子の、十歳(とお)には小さきが寒さうに、母親の古袷一ツに包まれたる寝姿を見て、急にホロリとなり、

これ御覧お前、たつた一枚の蒲団までも曲げてしまつた位なのだから、もうどうするものもありやアしないわね。だからお前二人ともまだ朝飯を喰べたきりぢやアないかよ。それに今頃丈なしで帰るなんざア、そりやアお前人間に出来る仕事なのかえ。私やアまだしも、これを可愛いとお思ひではないのかえエ、これお前、亀さん、亀さんツたら、お前はこれを見殺しにする気なのかえ。

前刻より妻の小言を添乳に、うとりうとりと眠りゐし夫、ここに至りてブルリと身を顫はせ、

ああ寒いや。

とクルリあなたへ寝返りうち、

チヨツやかましいなアいまさらいつたつてどうなるもんかい。たいていにして寝ろい。己れなんざアいつも一食だア。

女房はいとどぢれ込みて、夫の肩へ手をかけ、力を極めてこなた向かせむと力めながらさも口惜しさうに、

何だとえ、も一度いつて御覧、いくらお前でも、よもや二度とはいはれやアしまい。お前その一食が私を泣かせる原因なんぢやアないか。お前が三度三度に御飯でさへお腹をふくらしておくれなら、こんな思ひはしやアしないわね。お米よりきやアお米の水の方が、いくら高値くつくか知れやアしない、よくもそれを自慢らしくいへたもんだ。お前は一食でも二食でも、それはお前の好きでするんだ。私と松は明日からどうしておくれだえ。ハツキリと聞かしておくれ。私もお前の返答によつちやア、きつと思案を極めなくツちやアならないから。いかにもして夫の睡りを醒まさせむと、いよいよ押さへし手に力を入れて、その肩をゆり動かすにぞ、さすがは男の我を悪しとは知りながら、

うるせへえや。ふざけた真似をしやアがるな。

大喝一声やにはに起き上りて、女房の横腹を丁と蹴り上げ、おのれはそのまま子供に掛ける古袷の袖引き攫みて、肥大なる身をその脇に横たへむとせしに、子供ながらも空腹に眼敏き松之介、これに睡りを醒まされて、薄暗き燈に父を認め、

おツかア、ちやんはもう帰つたね。おらアお米を買つて来やうや。

睡き眼をこすりながら、むくむくと起き出づる、子の可愛さは忘れねど、腹立つ際とて、夫への面あて、わざともぎだうに突遣りて、

おツかアは知らないよ、ちやんにおねだりな。

でもちやんは寐てるぢやないか。

いいから起こしておやりよ、耳のはたで大きな声をするんだよ。

唆(そそ)かされて正直に、父のからだに取付きつ、

ちやんやちやんやお銭(あし)をおくれ、お米を買つて来るんだからヨー。

幾度か呼べど答へもなき出して、再び母の袖にすがるをさすがにも振切りかねて、我知らず松之介を抱き寄せ、

仕方がないからもう一寐入しなよ、今に夜が明けたら、おツかアがどうにかしてやるよ。

いい児だ寐なよ。

と背を撫づれば、いつしかすやすや泣き入る子と、夫の寐顔を見くらべて、深くも思ひに沈める内、多くもあらぬカンテラの油はここに尽き果て、ハタリ火の消えたれば、三人の寐姿は、闇に葬られたれど、夜もすがら苦しげにうめく妻の太息と、さも快げなる夫の鼾は、高う低う屋の棟(のき)に響きて、可愛や寐た間も魂は、米屋の軒をめぐる松之介の夢醒めむかと危ぶまれぬ。

（『女学雑誌』一八九七年二月二五日）

下

青き松白き砂、名にあふ舞子の浜のなかも、をしや暮色に蔽はれて、呼はば応へむ、淡路島山の影もやうやく薄墨に、なるとのかなたにほの見えし紀伊和泉のやまやまは、雲かとばかり波に消えつ。鏡のやうなる海面も、どんよりと黒みゆきたれど、波に尾をひく夕日影は、西の海に金色の名残漾はせつ。暮れむとして暮れはてぬ夕景色、夏ならはここ千金の一刻なるべきを、今は都人の花に酔ふ頃なれや、ここらそぞろ歩行（あるき）する人は稀なるに、病をここに養ふやらむ。老若二人の婢にかしづかれて、いづれ身分ある人の奥様と覚しきが、前刻よりこの松原を、ゆきては戻り、人戻りては行きたまふは、晩餐後の運動にもや。奥様はいと沈みたる調子にて、独言のやうに、

ああわたしは真実（ほんとう）に世が嫌になつたよ。なぜこんなに心細い気がするんだらう。ここへ来た当季は、あンまり景色がいいもんだから、何もかも忘れてしまひて、もとの活々（いきいき）とした身躰に返つたやうだつたが、慣れて来るとまたいろんな事を考へ出していけない。なぜうきうきとした気になられないんだらう。真実に私は自分で自分の身が嫌になつたよ。こんなにくさくさして生きてるんなら、死んだ方がよつぽどましだわ。なぜ死なれないだらう……

詞の末は半ば消えて、いつしか立止まりたる足の、白く細き爪先にて美しき砂を弄びながら、なほも思ひかねたまひたる様子に、老女はわざと軽くホホと受けて、

また奥様そんな事を思し召しましては、いよいよお身躰のお毒でござりまする。とかくさうお鬱ぎ遊ばすのが、一ツは御病気なのでございますから、こうして御養生に御越あそばしました限りは、何事もお思ひあそばしませぬが宜しうござりまする。何のあなた、小癪な事を、申し上げるやうではござりまするが、命あつての物種と申すではござりませぬか。何が何でいらつしやいませうとも、御身躰が一番お大事でござりまする。必ず必ずきなきな思し召してはなりませぬ。

いひかけて四辺(あたり)に気を配り、若き婢(おんな)の三四間後れたるに心を許し、

何のあなた、旦那様だと申し上げましても、いついつまでもああではいらつしやいますまい。ほんの一時のお物好きであそばすのでございませうから、あんなもの位にお気をおひけあそばさないで、何でも早く若様でもお嬢様でもお設けあそばすやう、一日も早くお達者におなり遊ばせな。オホホホホそれが何よりのお勝でござりまする。

とはいかなる子細ありてやらむ。奥様はいとどこれにむつがらせたまひて、血の気とてはなき唇を噛みしめたまひ、

またばアやはそんな気休めばかしいふよ。人を、人をツいつまでも子供のやうに思つて、賺(たら)さうとしてももうだめよ。それよりか一所に泣いてくれた方が、いくら力になるか知れやアしないわ。

露かあらぬか、奥様のお袖にははらはらと玉散りて、お顔を背けたまふかなたの木影に、し

よんぼりと立ちし男の子、田舎にも珍しきまでむさげなるが、これもしくしく泣きゐる様子に、奥様は我を忘れて、いぢらしがりたまひ、

ばアや、何だらうあの子供は、可愛さうに泣いてるぢやアないか。聞いて御覧、連れにでもはぐれたんぢやアないか。

老女も御機嫌損ねたる末のよきつき穂と、

オヤさやうでございますねー。承つてみませう、どう致したのでございますか。

いひながらかの子の傍へ立寄りて、優しく問ひ掛けしに、子供心にも人の深切身にしみじみと嬉しくてや、忍び泣きの急に切迫して、泣きしやくり上げながらのとぎれとぎれ、

ああおらアおツ母アを探しに、須磨まで行つて来たんだ。ちやんがお酒ばかし飲んで、構はないもんだから、おツ母アは去年の暮にどこかへ行つてしまつたんだ。

ヲヤお前のやうな可愛い子を置いてかえ。

ああだからおらアそれから毎日おツ母アを探してたんだ。それでもまるツきり知れないから、おらアいくらちやんに、おつかアを呼んで来てくれろツて、頼んだか知れやアしないんだ。

さうだらうともさうだらうとも

するとちやんが怒つたアな、あんなおつかアがそんなに恋しきやア、おつかアの所へうせろツて。おらアおつかアの処へ行かれる位なら、始めツからちやんを頼みやアしないや。そ

れからおらア……
といよいよ泣声になり、
おつかアに逢ひたくツても、ちやんが怖いから何もいやアしないんだ。おつかアの事をいふと直ぐ叱るから。
オヤマア可愛さうに、さうかい。
と老女は復命代はり奥様の方を振向きぬ。奥様は傍らの松の幹にもたれて、余念なく聞き入れたまふを、老女の瞳につれてこなた向きし子は、不意に奥様を認めて、その神々しきまでと蒼白く美しく、高尚(けだか)きに気を打たれ、円き眼を瞠(みは)りて見詰めゐたりしが、再び老女に、
それからどうおしだえ。
と問はれて我にかへりたれど、なほも奥様の方を気にして、我知らず着ものの前など掻き合はせながら、
だけれどちやんが正月から煩ひ出して、仕事にもゆかず、好きなお酒も飲まないで、寐てるんだ。おらアほんとにどうしやうかと思ふと、またおつかアの事を思ひ出したんだ。でもちやんはもう叱らないよ。おつかアの事をいつても……。ねえ伯母さんちやんはもうおつかアの事は怒つてゐないんだらうか。ねえさうだらうね。だからおらアまたそこら中聞いて歩行たんだ。おつかアを連れて来やうと思つてよ。
実(げ)にもとうなづく老女の顔を見て安心し、またそつと奥様の方をぬすみ見るに、目睫(めまじ)もせで

我が顔をまもりゐたまふに気後れしてや、しばし行きつまりてまた覚束なき語句をつづけ、
　するとおつかアは須磨の村雨亭といふお茶屋にゐると教へてくれたんだ。近所の桂庵の婆さんがよ。
怨めしさうに声顫はせて、
　そりやア先から知つてたんだけれど、おつかアがいつちやアいけないといつたから、それで言はなかつたんだと。でもちやんが煩つてるものだからツて、内証で教へてくれたんだ。それも今朝の事よ。だからおらア直ぐその足で須磨まで行つて来たんだ。
　エ須磨まで行つたのかえ、よくまア独りで行かれたね、可愛さうに。
と老女目をしばたたきて更に奥様の方に向ひ小腰を屈めて、
　何でございますとね、これが独りで須磨まで参つたのでござりますと。
奥様も聞きゐたまふことを改めて伝達するも、あまりの事に感心してなるべし。奥様もしばしばうなづきたまひ、始めて優しきお声にて、
　さう、そして分つたかえ。
老女に聞くともなく、かの子に聞かずとしもなく問ひたまへば、
　ああ分つたよ、分つた事は分つたんだけれど……
大粒の涙をポトリポトリと落としながら、
　おツかアは疾くに大坂へ行ツちまつたとさ、何でも大坂から養生に来てた、金持の旦那に

連れられて、行つたんだと。

この一句に老女は端なくも奥様と顔見合はせて胸轟かせつつ、忙(せは)しく子供に向ひ、

フム不思議な事もあるものだね、ではお前のおツかアの名は何といふの。

おおあツかアはお千代て云ふんだ、おらア松坊サ。

家はどこだえ。

明石なんだ。

オヤと老女振向きて、そと奥様のお顔色を窺ひしに、奥様は色も変はらせたまはねど、老の僻目か、御目の底少しきらめきし様にも覚えて、よしなき事を聞き出せし何となく心安からぬに、子供は何の心もつかず。またも無邪気に老女を顔を見上げながら、

なぜおツかアは大坂へなぞ行つたんだらう。大坂はよツぽど遠ーい処ぢやアねえか、なア伯母さん。だからおらア何しに行つたんだと聞くと、茶屋の奴め大変に笑やアがつて、知れた事だツて、教へてくれねえんだ。だつて伯母さん、誰だつても聞かなきやア分らないぢやないか。でもおらアあンまりいまいましいから、それツきり飛び出したんだ。で早く帰らうと思つてここまでせつせつと歩行て来たんだけれど、あんまり足が痛くなつたから、少し休んでる内に日が暮れかかつて来て、ああ淋しいなと思ふと、またおツかアに逢ひたくなつたのだ。だから今泣いてたんだよ。どうしやうねえ伯母さん、おツかアはもう帰らないんだらうか。おツかアが帰らなきやア、おらア一人で煩つてるちやんを、どうする事も出来ねえか

ら。おらアはやく大きくなりてえや。

かかる折には他人ながらも、その人たのもしく思はれてや、彼はまた老女の顔を覗き込みて、

ネ伯母さん、家へ帰つても、ちやんは怒りやアしめえか、何ともいはないで来たんだから。エ、エ、……

しばしば問へど、老女はとかく奥様の、お顔色のみ窺ひて、とみには慰めかねたるを、もどかしとや奥様の自ら進み出でたまひて、勿躰なや美しき手にも汚き子供の頭撫でたまひ、

お案じでない、今私がいいやうにしてあげるから。

老女に何か囁きたまへば、老女は心得て若き婢を招き、仰せを伝へたりと覚しく、彼は小走りしていづかたへか行きたるが、やがて小やかなる革提携へ来りしを、奥様は力なき手にそれを開き、中より幾片かの紙幣とり出でて老女に渡したまひしかば、老女は万事その意を得て、これを子供の肌へ、落ちぬやうに手拭もて括り付けながら、

ほんとにお前は仕合せものだよ。お慈悲深い奥様に、たんとお礼を申し上げないでは済まないよ。奥様がこの夥しいお金を、お前にお恵み下さるんだから。落とさないやうに持つてお帰り。さうすればちやんも怒らなからうし、また一月や二月は、お父ちやんもお前も、これで楽々と御飯が戴けるんだから。きつと落とさないやうに気を注けるんだよ。奥様も今ではここにいらつしやるけれど、やはりお家は大坂なんだから……

といひかかるを、奥様目顔で制したまへば、老女は本意なげに口を鉗みたれどさすがに老の繰

言止め難くや、更に詞を更めて、

時節が来たらお前のおツかアも、おつつけお暇が出やうから、その時はまた明石へ帰らないものともいへないわね。どうせ茶屋小屋に居た女が、いつまでも御大家に居て、奥様を蔑にしてゐる訳にもゆくまいから。ね、だからもしひよつと、この後お前おツかアに逢ふ事があつたら、忘れないでいふんだよ。何時何日頃舞子へおつまといふ婆がお附き申して、御養生にいらツしつた、それはそれはお前よりはよツぽど美しい奥様の、お救ひを戴いたといふ事をね。きつと忘れないで話すんだよ。それがお前、奥様への何よりの御恩報じなのだよ。子供ながらも、あまりに人の情の訝しく、奥様と老女の顔をのみながめゐるを、これも奥様のお心添にて、途中心もとなしとや、宿やの車にて送らせたまひぬ。

その後五六日を経て明石の町より、天ぷら蒲鉾など小さき荷籠に入れて、舞子のあたりまで売り歩行く子供あり。雨の朝も風の夕べも、この子の呼声聞こえぬ事なければ、人々の殊勝がりて、年もゆかぬにと、その身の上尋ぬれば、

おらアおつかアは居ないんだけれど、よその美しい奥様に、たアんとお金を貰つたから、それでかうして稼げるやうになつたんだ。ちやんも塩梅が直つたら、お酒も飲まないで稼ぐといつてるから、おらの許は、今に金持になつてみせらア。金持にせへなりやア、おツかアはどんな遠い処に居たつても、帰つて来るんだとちやんがいつてるよ。だからおらア何でも

稼いで金持にならなきアならないんだ。

威勢よく答ふるに評判売れて、今もそのあたりに肴屋の松坊松坊とてもてはやさるるはこの児なりとか。されどかの病みて美しき奥様と、健かにて忠実（まめやか）なる老女（うら）とは、今なほそこに在りやなしや。難波江も、名には聞かねば、知るよしなきぞ憾みなる。（『女学雑誌』一八九七年三月一〇日）

青空文庫情報

底本：「紫琴全集　全一巻」草土文化
　　1983（昭和58）年5月10日第1刷発行
初出：「女学雑誌」
　　1897（明治30）年2月25日、3月10日
※底本では、文末の日付に添えて『女学雑誌』を示す記号として「＊」を用いていますが、『女学雑誌』に直しました。
入力：門田裕志、小林繁雄
校正：松永正敏
2004年9月20日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

磯馴松

清水紫琴

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　https://aohelp.club/
BiliBili　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/